

(参考様式1) 議事録

令和7年度 第3回 学校運営協議会(定時制部会) 議事録

校名	大阪府立大手前高等学校
准校長名	渋川 雅宏

開催日時	令和8年2月20日(金) 15:00~16:00
開催場所	大阪府立大手前高等学校 会議室
出席者(委員)	平野 智之、高木 学、平田 圭介、佐藤 道廣、堀 剛士
出席者(学校)	渋川 雅宏、石野 靖、川端 俊範、神原 優希、砂田 純平、 矢野 直子、佐藤 知弘、加藤 千穂美、坂本 達也
傍聴者	なし
協議資料	令和7年度学校経営計画及び学校評価(案)、 令和8年度学校経営計画及び学校評価(案)
備考	なし

議題等(次第順)

- 1 授業アンケート評価の変化について
- 2 学校教育自己診断まとめについて
- 3 令和7年度学校経営計画及び学校評価(案)・令和8年度学校経営計画及び学校評価(案)について

協議内容・承認事項等(意見の概要)

1 授業アンケート評価の変化について

- ・長らく4点満点中3.5を上回る高水準を保っており、すごいと思う。
- ・素晴らしいと思う。これ以上言うことがない。
- ・第1回のアンケート結果では、3.6を超えていた。第2回の学校運営協議会では、ルビ振りや外国籍生徒への丁寧な日本語指導といった真摯な取り組みが、成果(数字)の土台になっているとの認識で一致した。今回のアンケート結果においても、その傾向は継続していると考えられる。
- ・先日、貴校にて講演をさせていただいたが、生徒の皆様の素晴らしい反応を肌で感じる事ができた。これは、日頃の丁寧なご指導の賜物と拝察する。特に、外国にルーツを持ち日本語が十分でない生徒さんの傍らに常に教員の方が寄り添い、タブレットや言葉を尽くして通訳しながら進めておられた姿に感銘を受けた。一人ひとりを決して取り残さないその姿勢こそが、教育現場のあるべき姿な

のだと改めて強く実感した。そこで、授業でこんな工夫をしているという事例があれば紹介してほしい。

→1年次の「現代の国語」では話す・聞く力の育成に重点を置いているが、コミュニケーションに課題を抱える生徒が多いため、4人組での活動や壇上での発表を避け、インタビュー形式のペアワークを導入。その結果、全生徒がペアでの対話に習熟し、自席から自分の考えを発表できるまでに成長した。

→2年次の「言語文化」では、古文・漢文を対象に、基礎の徹底から応用的な指導までを展開した。特に助動詞や活用、漢詩においては、標準より高い水準の指導を試みたが、生徒の知識定着は概ね良好である。この習得した古典の知識を、単なる暗記に留めず、現代社会にも通じる「リテラシーのある国語」へと発展させていきたい。

→ネパール国籍の生徒たちが自国の文化を日本語で発信する姿に、指導の成果を感じた。外国語で自己のルーツを語るという、我々が英語スピーチに挑むような難度の高い学習活動を、昨年から着実に継続されている。その熱意ある指導姿勢に深く感銘を受けた。

2 学校教育自己診断まとめについて

- ・生徒、保護者、教職員への質問項目をよくみると、生徒には「先生と生徒の関係」を聞き、親には「子どもの様子」を聞き、教職員には「先生同士の関係」を聞いている。学校の分析では、生徒は授業や教員との関係に概ね満足しており、保護者もその様子を肯定的に捉えているが、一方、教職員では、組織運営や教員間の関係性、業務負担に関する評価が低い傾向にあるとのこと。生徒の満足度が教員の献身的な努力（負荷）によって支えられているのだとしたら、持続可能性の面で危惧を覚える。
- ・教育庁が示した質問項目に準拠しているとのことだが、答えるだけでも結構大変に思う。
- ・質問項目のすべて実現しなければならないのなら、教員の仕事は大変だと感じる。先生になりたい人がいなくなるのではないかと心配に思う。
- ・「学校に行くのが楽しい」という回答は77.4%で、昨年度の84.8%から少し下がっている。80%を下回ると、「学校に来ている意味がある」と感じられていないのではないかと、とも受け取れるが、それが生徒自身の思いによるものなのか、あるいは家庭の事情など外的要因によるものなのかは判断しづらい。

本校の生徒の立場になって考えてみると、「学校に行くのが楽しい」と感じる生徒は、もっと多くてもよいように思う。というのも、クラスには人生経験の豊富な人がいたり、国籍も多様であったり、同年代の生徒もいる。このような環境では、自分の知らない世界や価値観に触れ、多くのことを学べる。

だからこそ、「学校に行くのが楽しい」という数値は、本来もう少し高くてもよい

のではないかと感じている。

実際に授業を参観した際、先生方は常に生徒のそばに寄り添い、丁寧にサポートしておられた。また、生徒と教員の関係も、いわゆる「先生と生徒」という堅い雰囲気というよりも、友達同士のようなリラックスした空気が流れていた。

そうした様子を見ていたため、今回の 77.4% という結果には、がっかりしたというよりも「意外だった」というのが率直な感想である。

- ・学校そのものを「楽しい」と感じているのか、あるいは「楽しくない」と感じているのかについては、一概には判断しづらい。午後 5 時半から登校するという生活リズムの大変さが影響している場合もあれば、中学校時代に不登校だった生徒が、「楽しい」というよりも“学校へ行く意味を見いだし始めている”段階である可能性もある。このように、生徒によって感じ方は多様であり、丁寧に精査していく必要がある。
 - ・日本人の生徒が感じる「楽しい」と、外国籍の生徒が感じる「楽しい」は、同じ言葉であっても意味合いが異なる可能性がある。中には、「学校は楽しむ場ではない」と考える文化背景を持つ生徒もおり、「楽しい」と答えること自体をためらう場合も考えられる。また、「楽しい」よりも「学びに来ている」という意識が強い生徒もいるだろう。このように、回答の背景には文化的・価値観的な違いが影響している可能性がある。
 - ・アンケートの実施方法によっても結果が変わる可能性がある。対話的に一人ひとりに聞き取る方法と、タブレットを使って回答を得る方法とでは、生徒の感じ方や答え方に違いが生じているのかもしれない。
 - ・数値は上昇傾向にあるものの、依然として低い項目も見受けられる。たとえば、28 番の「教職員間で相互理解がなされ、信頼関係に基づいて教育活動が行われている」は 42.9%、35 番の「初任者等、経験の少ない教職員を学校全体で育成する体制がとれている」は 46.2% と低い。
これらの結果から、人員不足などの影響により、人材を育成するための体制づくりが十分に行き届いていない様子がうかがえる。どの職場でも組織運営上の課題として生じやすい部分ではあるが、貴校でも同様のしんどさが現れているのではないかと感じる。
 - ・12 番の「生徒による問題行動が起こった時、組織的に対応できる体制が整っている」や、13 番の「様々な問題行動の防止のために早期指導に学校全体で取り組んでいる」も数値が低い。これらも、人材不足が背景にあると考えられ、教職員の皆さんは本当に大変な状況で取り組まれているのだと感じた。
- 13 番について。感覚的には、教職員はよく取り組んでいると感じている。一方で、教職員の中には「もっとできるはずだ」と危惧している人もいるのではないかと思う。教員の自己評価が高く、保護者の評価が低いという状況は問題であり、逆に言えば、まだ改善の余地があると受け止めているのではないだろうか。
- ・以前に比べて初任者の数が減っており、どの学校においても、どのように育成し

ていくかが大きな課題となっている。

- ・赴任後まもなく体調を崩し、そのまま退職してしまうケースもあると聞いている。
 - ・そうした事態を防ぐために、教職員が互いに支え合いながら対峙し、工夫を凝らして取り組んでいるようである。
- 人材育成の面では、定時制は教員数が少なく、教科によっては担当が2名程度しかいないこともある。そのため、定通の校長会では、夏季休業中に「定時制の教科集会」のような場を設けるなど、定通全体で人材育成に取り組んでいく必要があるという課題認識を共有し、対応を進めているところである。
- ・先生方にどれだけ余力があるのか、いわば輪ゴムにたとえると「まだ伸び縮みできる余裕があるのか」それとも「すでに限界まで伸びきってしまったのか」を知りたいところである。いずれにせよ、体を壊さないよう、頑張ってもらいたいと思う。
 - ・学級定員などに基づいて教員数は配置されているものの、どの学校でも十分に足りているとは言い難い。限られた人員の中で、先生方は余力のない状況でも懸命に取り組んでおられるという印象を受ける。
 - ・一つの提案ではあるが、教員だけに任せるのではなく、スポーツ団体から特別に指導者を招聘したり、絵画や彫刻を学びたい生徒には専門家を呼ぶなど、外部人材を活用する方法も考えられる。セミプロや大学生に協力してもらうことも可能であれば、教員の負担軽減につながり、少しでも余力を生み出せるのではないかと思う。
 - ・外部の力を借りることで先生方に少しでも余裕をもってもらい、その分を教育活動に充ててもらおうほうがよいのではないかと思う。アンケート結果を見る限り、教職員の負担が大きいことがうかがえるため、そのような工夫が必要だと感じている。
- 本校では、学校支援人材バンクの制度を積極的に活用しているところである。先ほど述べた日本語指導も、その活用事例の一つである。
- ・委員会の意見を踏まえてのコメントがあればお願いしたい。
- 「学校は必ずしも楽しい場所ではない」という意識で来ている生徒も一定数いる一方で、学びの場として前向きに通っている生徒もいるのだと思う。
- 改めて資料を分析すると、今年度はB（否定的な意見）の割合が最も少ないことが分かる。また、Cが7名ほど増加していることから、100%「楽しい」とまでは言えないものの、「楽しい日もないわけではない」という気持ちで登校してくれている生徒が増えていると読み取れる。
- そうした状況を踏まえると、教職員としては、生徒が「顔を見せに来てくれる」だけで十分ではないかと感じている。
- ・9割以上の生徒が「学校に行く意義を感じている」と回答しており、その点は非常に素晴らしいことだと思う。

3 令和7年度学校経営計画及び学校評価（案）、令和8年度学校経営計画及び学校評価（案）について

- ・小学校から引きこもり状態にあった児童・生徒が、自立訓練施設での支援を経て、定時制高校へ通学できるようになった事例はあるか？
→考えられるケースではあるが、本校ではそのような事例はない。
- ・不登校生徒の進路として通信制高校が一般的になりつつある中、貴校は自治体の地域協議会に参加し、情報共有を積極的に行われている。その特性上、中学時代に不登校を経験した生徒を受け入れる機会も多いものと拝察する。
- ・貴校では多くの生徒が各賞を受賞されていると伺っている。その成果は、長年受け継がれてきた伝統的な取り組みによるものか、あるいは先生方の継続的なご指導の賜物であるのか、その要因や背景について、ぜひお聞かせ願いたい。
→要因は多岐にわたると考えられる。教員の熱心な指導はもちろん、生徒自身の意欲や能力、さらには非常勤講師や人材バンクの方々による外部からの支援などが相乗効果を生んでいるのだろう。どれか一つというわけではなく、関わる皆様の尽力が結実した結果ではないかと思う。
- ・人権作文の審査に携わったこともあるが、先日の全校生徒を前にしての作文披露には深く感銘を受けた。生徒さんのやる気を引き出す力が、学校全体に満ちていると感じた。ただ『書きなさい』と指示するのではなく、『この舞台で挑戦してみよう』と背中を押す、細やかな導きがあるのではないだろうか。先生方と生徒さんの間に流れる温かな関係性こそが、あの素晴らしい発表を生んだのだと感じている。
- ・そのように思う。一つ付け加えるならば、先生方の熱意についてである。他校との比較はできないが、大手前高校の授業を拝見して、理解が追いつかない生徒を根気強く支え、クラス全体の水準まで導いていく先生方の姿には、この一年間、深い感銘を受けた。
- ・先日の枚方市の進路説明会での貴校のPRに感謝したい。次年度も同様の会を予定しているので、引き続きのご協力をお願いしたい。説明会に参加した生徒たちが、貴校への進学をきっかけに自立への一步を歩み始めることを切に願っている。
→説明会に参加された生徒・保護者が、本校の学校見学会にも足を運んでくれて、大変嬉しく思っている。
- ・卒業後の進路保障（フォローアップ）は、何年くらいまで行っているのか？
→卒業後3年間のフォローアップを実施。3年前の卒業生は定着しているが、直近2年の卒業生には早期退職者が出ており、就労定着に向けた継続支援の重要性を感じている。
- ・卒業後のフォローアップを3年間継続されている点は心強く思う。3年前に卒業した生徒さんが元気に活躍されている一方で、直近の卒業生に早期離職が見られ

る点は、今後の課題として注視すべき点かと思う。引き続き、進路先への訪問等を通じた粘り強いご支援をお願いしたい。

- ・不登校支援や就労支援は、学校単独で完結するものではなく、地域や多様な団体が手を取り合い、高校生や青年期の方々、そして時には高齢層までを『網の目』のように包み込んでいく多層的な支援体制が、今こそ不可欠であると痛感している。

※ 令和7年度学校経営計画及び学校評価（案）・令和8年度学校経営計画及び学校評価（案） → 承認

次回の会議日程（予定）

日 時	令和8年6月30日（火） 15:00～16:00
場 所	大阪府立大手前高等学校 会議室